

コリント人への手紙第25章 「主のために生きる道」

1A 幕屋なる肉体 1-10

1B 天からの住まい 1-5

2B 主から離れている時 6-10

2A キリストの愛 11-21

1B すべての人のための死 11-17

2B 神との和解 18-21

本文

コリント人への手紙第25章を開いてください。午前礼拝でお話ししましたように、パウロは、今、自分が死の覚悟もしなければいけないほどの苦しみを通っているけれども、それでも落胆はしませんということをお話ししました。それは、目に見えないものを見ているからであり、内なる人は日々新たにされているからだと言います。けれども外なる人は衰えます。肉体には弱さを持っています。しかし、その中でも心強いのは、重い永遠の栄光があるからだと言います。

1A 幕屋なる肉体 1-10

そこでパウロは、その栄光が待っている、天からの贈り物、天からのからだを待ち望んでいます。このからだは、キリストのゆえにぼろぼろになったとしても、主は報いとして天に自分のからだを用意しておられることを知っているのです。

1B 天からの住まい 1-5

¹たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちに天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。² 私たちはこの幕屋にあつてうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。

パウロが、4章で自分たちのことを「土の器」と呼んでいたように、この体は脆いものです。パウロは、ここで幕屋と言っています。見えるものは一時的であるとの手前、4章18節で言っているように、幕屋は一時的なものです。私たちが、テント暮らしをしたら、それが数日間であればなんとかやって行けるものの、数か月過ごすのであれば、もう耐えきれないかもしれません。あくまでも一時的なものです。それが幕屋であり、また風が吹けば飛んでいくかもしれないものです。壊れてしまうものです。私たちの肉体はそのように弱さを抱えています。しかし、建物は違います。そこには定住ができます。そうしたからだを、神は用意してくださっていて、それを「神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まい」と呼んでいます。

そして、今、「この幕屋にあつてうめ」いている、と言っていますね。ローマ 8 章を見ると、それは体の贖いを待ってうめいているのだと言っています。私たちの霊は、贖われました。御霊によって新たにされました。私たちの内なる人は、栄光から栄光へと主の似姿に変えられます。しかし、外側は衰えます。そして何よりも、このからだには罪の原理が働いていて、自分の霊が神に仕えたいと願っていても、それをさせない力が働くのです。御霊が与えられているので、この方に従えば、私たちは肉の欲を満たすことはありません。けれども、いつも肉の欲望との葛藤があり、罪との戦いがあり、うめいているのです。しかし、天から与えられる住まい、復活の体、栄光の体はキリストに似たものであります。「しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。(Iヨハ 3:2) 」罪を宿していないからだに変えられるのです。

私たちはちょうど、霊は新たにされたけれども、からだは新たにされていないという中間地点にあります。以前は、霊は死んでいて、かつ、罪のからだの中にいますので、矛盾がなかったのです。そして将来は、霊は生きていて、からだも主の似たものになっているので、矛盾がありません。今が、霊は生きているのに、からだは以前のままでいるということで矛盾が生じ、それでうめくこととなります。しかし、「では、なんで、そのような中途半端なままに、神がしておられるのだろうか？」と思うかもしれません。それは後で出てきますが、地上においてしなければいけないことがあるからです。キリストを伝えることです。キリストの証しをすることです。キリストご自身が、矛盾の中で生きられました。神であるにもかかわらず、肉体を取られたのです。それは、父なる神ご自身を人々に証しされるためです。それと同じなのです、主を証しするために私たちは、この矛盾の中に生かされているのです。

³ その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態にいることはありません。⁴ 確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負ってうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。

ただ肉体が苦しくて、それで逃げたいから、うめいているということではありません。私たちは苦しみを受けると、どうしても現実から逃避したいと思ってしまう。しかし、そうした消極的なことではなく、むしろイエスご自身に顔と顔を合わせてお会い出来、そして天の住まいを着たいからという積極的な理由があつて、うめいているのです。ここが、いわゆる自殺願望と、天の望みに満たされて殉教する人の違いでしょう。自殺は、今、この地上で生きるのが嫌だ、というものです。けれども、天の望みに満たされている人は、この地上に生きているならば、生かされていることに、主のみこころがあることを知っています。この地上で、実を結ぶことを知っています。けれども、もしこの地を去るのであれば、その時は主ご自身にお会いでき、自分のからだは新たに与えられることを知っているのです、喜びに満たされるということです。

⁵ そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは、神です。神はその保証として御霊を下さいました。

主が、新しい、天からの住まいを整えておられます。主ご自身が私たちの朽ちていくからだを、朽ちない、栄光あるからだに変えてくださいます。そして、その保証として御霊をくださっているのです。エペソ書でも、パウロがこのように話しています。「エペ 1:13-14 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとされ、神の栄光がほめたたえられるためです。」この保証は、頭金と訳すことができます。頭金は、購入者が自分が買うことを保証するお金ですね。例えば、300 万円の車を買うという時に、売り手に 30 万円の頭金を払います。もし、他の車が欲しくなって買うことをやめる時に、売り手は、そのお金をもらうことができます。なぜなら、本当は他に買い手がいたのに、その人に売ることができなくなっているからです。そういったことで、頭金は購入金額の一部であり、また購入することは本気で考えていることを保証するものです。

つまり、主が用意されている、天における至福、神の国における祝福の一部が、御霊ご自身であるということです。御霊によって、私たちが祝福を今、受けているならば、キリストの愛が注がれ、喜び、平安が与えられ、聖めを経験しているならば、それはごくごく一部で、将来には、とてつもない大きな栄光が備えられていることを保証しているのです！

2B 主から離れている時 6-10

⁶ ですから、私たちはいつも心強いのです。ただし、肉体を住まいとしている間は、私たちは主から離れているということも知っています。⁷ 私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます。

パウロは、4 章においては、「私たちは落胆しません。」と書いていました(1,16 節)。ここでは、さらに確信をもって「いつも心強いのです」と書いています。苦しんでいる間でさえ、イエス様のいのちが働いて、実が結ばれていることで落胆していません。そして、このからだは弱まっていますが、それでも天に、神の住まいが用意されているので、心強いのです。

けれども、地上にいる限り、天におられる私たちの主から離れていることも知っています。ですから、これらのことは目で見ているのではなく、すべて信仰によって見ているのです。ペテロも同じことを話しました。「I ペテ 1:8-9 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。⁹ あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。」目では見ていないのですが、信仰によって、栄えに満ちた喜びに躍っています。

⁸ 私たちは心強いのですが、むしろ肉体を離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています。

パウロは、このジレンマ、板挟みについてピリピ人への手紙でも話していました。「ピリ 1:22-23 しかし、肉体において生きることが続くなら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。23 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。」主のみもとに住むことのほうが、はるかに優れているに決まっています。だから、この肉体から離れることのほうが良いと思っています。けれども、それは現実逃避ではないのです。次を見てください。

⁹ そういうわけで、肉体を住まいとしていても、肉体を離れていても、私たちが心から願うのは、主に喜ばれることです。

肉体を離れる時には、神がそうされます。主がみこころの内に、この肉体を住まいとしているし、またそうでない時は、肉体から離れさせます。いずれにしても、今、主を喜ばせることこそが、心から願っていることなのです。ですから、二つのことを思ってください。今、自分はこの地上で生きるのに疲れを覚えている。できるならば、この世から離れたい、天に召されたいと願っている人には、「主が喜ばれることを、ここで行いなさい。」ということです。主は、実を結ばせるために、あなたをここに置いておられるのです。そして逆に、自分が病にかかっておられて、自分はずっとこの地上でやりたいことがあるのに、なぜこうになってしまうのだろうと思っている方がおらえたら、「いや、主はご自分のみもとに、あなたを招き入れたいのだよ。」ということを考えればよいのです。いずれにしても、主の喜ばれることを行うのです。

¹⁰ 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

主を喜ばずことをパウロは、話したので、ここで、この肉体にいることについて、報いがあるのだとうことを話しています。覚えていますか、コリント第一において、主が来られる時に、裁きがあることをパウロはすでに話していました。「4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」裁きといっても、称賛が与えられると言っています。パウロが、ここで語っているのは、キリストの御座であり、称賛を与えるための裁きであります。刑事裁判の判事が下す裁きではなく、オリンピックの競技で審判する時の裁きです。ですから、表彰台に立って、冠を受けるところの裁きです。

パウロはまた、第一コリント 3 章で、イエス・キリストの土台の上に家を建てる時に、金銀、宝石、木、草、藁で家を建てる時、それぞれの働きが火によって明らかにされる。主が来られる日に、試

されて、残ったものに従って報いを受けることを話しています。そういった裁きです。自分の肉体がある時に行ったことが、必ずそうした報いとなるのだということです。悪いことは、火で焼かれます。良いことのみが残ります。

私たちは、第一コリント 15 章で、復活がなぜ大事かについて見ていきましたが、それは、自分がこの肉体で行ったことが、よみがえり時に報いとして残るからだということを学びました。死者の復活を否定すると、今していることは今で終わってしまい、どうせ死ぬのだからとして、この肉体においてやりたいことをしていく、罪の生活をしていくようになるということをパウロは警告しました。

2A キリストの愛 11-21

こうしてパウロは、肉体の弱さの中にあることについてずっと述べてきました。再び、自分が主から召されていることについて話を戻していきます。

1B すべての人のための死 11-17

¹¹ そのため、主を恐れることを知っている私たちは、人々を説得しようとしています。私たちのことは、神の御前に明らかです。しかしそれが、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです。

パウロは、「主を恐れることを知っている」と言っています。今、肉体で行ったことに対して、主が報いを与えられるということの話したのですから、こうした恐れがあつてこそその歩みです。そして、そうした主に対する恐れがあるからこそ、パウロは、自分が神に召された使徒であることを説得しようとしているのです。彼が自分を推薦するために、こんなことを言っているのではなく、むしろ、神の召しに忠実であることが今、必要なのです。

パウロたちは、自分たちがそうした召しに応答していることは、神の御前で明白です。けれども今、必要なのは、コリントの人々の良心にも明らかになることです。パウロたちによって建て上げられた教会であり、彼らはキリストの福音をその働きによって信じ、育てられていきました。ですから、ここでパウロの使徒としての働きを、外部から来た者たちのいわれなき批判によって揺るがしてしまつては、自分たちの立っている福音信仰まで揺るがしかねません。事実、彼らはモーセの律法を福音の中に持ち込んでいるようであることが、3 章を読むと伺われます。ユダヤ主義を掲げている偽使徒、偽教師がいた可能性があります。ですから、パウロが、自分自身が使徒であることを、コリントの人たちが信頼を寄せることが、今、死活的なのです。

¹² 私たちは、またしてもあなたがたに自分を推薦しているではありません。むしろ、あなたがたに私たちのことを誇る機会を与え、心ではなくうわべを誇る人たちに応じられるようにしたいのです。

これは、健全な誇りです。神の恵みによって、私たちはキリストの福音を信じているのだという誇りです。そして、そのことを伝えるパウロたちがいるのだという当然の、神への感謝です。偽教師たちは、自分たちをうわべで誇りました。おそらく、エルサレムから来ているであるとか言って、コリントの人たちは霊的に劣っているかのような話をしているのだと思います。

「心ではなくうわべを誇る」ことについて、イエス様は戒めていましたね。イエス様のことを、ああだ、こうだと批評していたユダヤ人に対して、「ヨハ 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」と言われました。主は、父なる神のみこころを行っておられました。たとえば、取税人や罪人と食事を取られました。そのことが気に食わず、それでイエス様のことを批判し、うわべで裁いていたのです。私たちの教会に対して、もし、ああだこうだと、根拠の薄い批判をしているものがあつたら、私たちも、神の恵みによって生かされているのだということで、健全な誇りをもって応じていけないといけません。

¹³ 私たちが正気でないとすれば、それは神のためであり、正気であるとすれば、それはあなたのためです。

パウロは、人間的な目で見れば、「正気でない」と見られていました。キリストが罪人を救うために来られ、そしてご自身が罪人として裁かれ、罪人を正しいとみなしていく福音を語っていたのですから、気が狂っています。また、罪と死の法則が働いているこの世において、罪を滅ぼし、死を滅ぼす復活を宣べ伝えていたのですから、気が狂っています。このことを、パウロがヘロデの前で弁明した時に、聞いていたローマ総督フェストゥスが指摘しました。パウロが、ヘロデにキリストの福音を宣べ伝えたのです。その部分から読みます、「使 26:23-24 すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになると話したのです。」²⁴ パウロがこのように弁明していると、フェストゥスが大声で言った。「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」いきなり、キリストが苦しみを受け、死者の中から復活したということ。それがイスラエルの民だけでなく、異邦人にも光となっていることを言われたものですから、狂わせていると言っているのです。

しかしパウロは答えます。「²⁵ フェストゥス閣下、私は頭がおかしくはありません。私は、真実で理にかなったことばを話しています。」そうですね、パウロは今、ヘロデがキリスト者になってほしいと願って語っているのです。真実で理にかなったことを話しています。これが、パウロがここで言っている、「正気であるとすれば、それはあなたのためです。」ということです。パウロは、神のゆえに、気が狂っていると思われるいても厭いませんが、しかし、きわめて理に適ったことを語っていることを、コリントの人たちには知ってほしかったのです。パウロの心は、いつもコリントの人たちのことを思っていますが、コリントの人たちが自分たちの中で心を窮屈にしていたのですね。

¹⁴ というのは、キリストの愛が私たちを捕らえているからです。私たちはこう考えました。一人の人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである、と。

パウロたちの心は、キリストの愛でした。キリストの愛に捕らえられていました。先ほど、キリストの裁きの座で、私たちが報いを受けることを聞きましたが、人に見える形の行いのみでは、その裁きの物差しは分かりません。パリサイ人や律法学者が、人に見られるようにして善行を行っているので、すでに報いを受けていて、天の報いがないことをイエス様は言われましたね。では、どんな物差しで報いを受けるのか？それが、「キリストの愛」です。この方の愛をどれだけ受け入れて、応答しているか、その心の思い計ることにしたがって報いられます。

そして、パウロが大胆に語っているのは、「すべての人が死んだのである」ということです。キリストが全ての人のために死なれました。ということは、すべての人が罪の中で死んだのです。生きている人々に対して、「あなたは死んでいます」といったら、怒りますね。それだけでつまずきますね。すべてではなく、一部の人だけが罪の中に死んでいると言えば、自分はそんな死んでいるわけではないと言い訳ができますから。けれども、例外なしに罪の中で死んでいるとしたのです。気が狂っていると思われるかもしれませんが、けれども、それこそがキリストの愛であり、すべての人が罪の中に死んでいるからこそ、すべての人のために死なれました。

それから、「一人の人」がそのことを行われたということも、反発を呼びます。イエスは数ある救い主の中の一人で、他にも救いの道があると教えれば、反発は少ないでしょう。けれども、救われるべき名としては、イエスの他に天下にはないとペテロもサンヘドリンのところで宣言しています。

¹⁵ キリストはすべての人のために死なれました。それは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためです。

次の福音は、この方がよみがえられたことです。これも、福音が、生きている人が自分のために生きるのではなく、この方のために生きるためなのだということも、人をつまずかせます。人は基本的に、自分のために生きていますから。そうではなく、すべてを捨てて、この方のために生きるために自分は生きているのだ、ということなのです。人は、自分のためでなければ、愛する人のために、家族のために、あるいはお国のために生きるとかいうことはあっても、まさか、死者の中からよみがえられた方のために生きるって、その復活をただ知的に理解しようとするだけでなく、自分のいのちをかけるまで信じるということを意味します。気が狂っています。けれども、それは理にかなったことなのです。

¹⁶ ですから、私たちは今後、肉にしたがって人を知ろうとはしません。かつては肉にしたがってキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。

うわべだけで人を判断しているのが、その偽使徒たちでした。けれども、キリストのなされたこと、その愛は、うわべでは気が狂っていると思われるほど、型破りなのです。そういったところで人を知って行こうとしてはいけない、ということです。

パウロは、以前、肉にしたがってキリストを知ろうとしていました。回心する前ですね。それで、この道を滅ぼさなければいけないと思って、神の教会を迫害しました。けれども、そうした人間的な判断をすることは、もはやしないと言っています。私たちも、キリストの愛を知ったのであれば、教会の人々を見ていく時、また周囲の人々を見ていく時、肉にしたがって知って行こうとしてはいけませんね。うわべで見ていってはいけません。

17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

パウロが語っているキリストの福音が、神の新しい創造なのだということをここで知ることができます。神は天地を創造され、ご自分のかたちに人を造られました。しかし人が罪を犯し、世界に罪と死が入りました。被造物もうめいています。しかし、神の本質の現れであるキリストが世に来られました。そして罪を取り除いてくださいました。そして三日目によみがえられたのです。罪と死の原理を、キリストの義といのちによって打ち勝ったのです。これで、世が減んでいくという中で、新しく創造が始まりました。キリストのよみがえりによる新しい創造です。そしてキリストが再臨される時に、すべてのものがこの方の支配に入り、そして父なる神にすべての主権と力を明け渡されます。その時に、天地は全く新しくされます。黙示録 21 章と 22 章にある、新天新地と、新しいエルサレムです。この中に、あなたがたが入っているのだよ、というのがこの箇所です。つまり、私たちは終わりの日にある、最終的な姿、新天新地という新しい創造を、キリストにあって一人ひとりの中で前もって経験させていただいている者たちです。

ですから、人を見ていくということが、肉にしたがってはいけません。中途半端に、人間的な要素を入れて判断することが、いかに間違っているかを教えられます。

2B 神との和解 18-21

パウロは、さらにコリントの人たちに、福音を伝えます。彼らはもちろん、福音を信じているのですが、そうした偽教師たちの煽りによって、自分たちの立っている福音を見失ってしまっているのです。パウロたちに、敵意さえ抱いてしまっているような人々が一部にあり、パウロは、そもそも自分自身が神と和解させられた者たちであることを忘れてしまっています。人を赦せない人が、神がその人を赦されたということを忘れてしまって赦せない、となるのですが、神の和解を忘れてしまっているのです。パウロたちに持たなくてよい敵意や疑いを持ってしまっているのです。

¹⁸ これらのことはすべて、神から出ています。神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。

パウロは、3章で「私たちの資格は神から与えられる」と言いました(5節)。使徒であることは、自分自身のうちに何かあるからではありません。むしろ、自分自身は土の器なのです。このことを何度となく話していますが、ここでも、「これらのことはすべて、神から出ています。」と言っています。

その上で自分たちに与えてくださった、和解の務めを話しています。「神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ」ということです。

¹⁹ すなわち、神はキリストにあつて、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のこぼれを私たちに委ねられました。

ここで大事なことは、神がすでに世をご自分と和解させておられるということです。もう、背きの責任を私たちに負わせていない、キリストご自身にその責任を負わせることによって、和解のこぼれを与えておられるということです。ともすると、「あなたが、イエスを信じなければ、神は許さない。地獄いきだ！」というメッセージだと思ってしまうことです。そうではありません。神はキリストにあつて、自らを傷つけて、それで和解の使信を私たちにくださったのです。

同志社大学というのが、京都にあります。その創立者は新島謙です。彼が校長だった時に、集団で授業を欠席した者たちが現れました。これは校則で処罰されないといけません。けれども、その集団欠席した者たちや関わっていた教員たちのことで深く心を痛めました。しかし校則は守らなければいけません。どうしたか？彼は、「ゆえに校長自身を処罰します、と宣言して、用意した固い木の小枝で、自分の左の掌を力いっぱい打ち始めた。むちは折れ、掌に血がにじみ出た。」¹ということです。このような和解の働きによって、私たちは自分の罪の重さを知り、そして悔い改めて、その和解を受け入れるのです。

²⁰ こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なのです。私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。

こうした和解のこぼれを、使徒たちが伝えるように神がしておられます。ですから、彼らは「キリストの使節」であります。自分たちに権威があるわけではありません。ただ、キリストの権威を任されているだけなのです。自分たちはあくまでも僕です。けれども、大胆になる必要があります。使節だからです。いわゆる大使館にいる全権大使です。その国の権威が遣わされている国において任さ

¹ https://www.christian-center.jp/dsweek/07au/t_1106.html

れているのです。私たちはそこで、神の恵みによるへりくだりと、大胆さが必要です。

そして、勧めているのです。命令しているのではなく、願っています。和解の使信なのですから、相手がそうだと自覚して受け入れるのでなければ無意味なものになります。

²¹ 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。

その和解とは、交換をしている和解ということです。罪人である私たちの罪が、キリストの上に置かれました。この方が罪人として十字架につけられました。けれども、キリストは正しい方です。何一つ罪を犯していないと、周りの人々が、実にイスカリオテのユダまでが証言しました。この正しい方の義が、私たちに与えられたのです。このような、全く理不尽なように見える交換が行われました。それは全く、神の愛によるものです。神に対して気が狂っているとパウロが見なされても構わないとした理由がそうなのです。神が、そこまでして愛をもって、全く理不尽なことをキリストにあつてご自身のうちに課したのです。愛とは何かということを教えてくれるし、また愛によって成熟した人は、全く理にかなわないことでも、自分の権利を主張せずに、人々の益のために動くことができます。

こうしてパウロは、自分の使徒職を弁明しながら、なおのことコリントの人々が福音の真理を思い起こすように教え導いています。この福音において、初めて彼らが心を開いて、パウロたちと和解をすることができます。私たちの間にある問題も、それは横の問題であり、実は縦の問題から来ていることがあります。神とキリストの福音に根ざしていれば、自ずと横の問題も解決されるのです。